まちかど・ズーム IN!

みなさんからの素敵な情報を待ってます！

障害に負けないで

成人を祝う会

１月20日、障害のある子供を持つ親たちでつくる白石市手をつなぐ親の会（蓬田明会長）による「成人を祝う会」が市内で開かれました。

はじめに新成人となった３名へ記念品が手渡され、続いてボランティア団体による手品や歌などの祝福を受けました。３名は「仕事で頑張りたい」などと、大人への誓いを新たにしていました。

打つ手に力がこもる

新春囲碁・将棋大会

中央公民館で１月20日、第40回「新春囲碁・将棋大会」が開かれました。

大会は実力に応じた段級別によるリーグ戦で行われ、参加した小学生から81歳までの54名は、真剣な表情で一手一手に取り組みました。

優勝者は次の方々です。（敬称略）

●囲碁の部　A組／鈴木秀雄（越河平）、B組／伊藤トヨ子（大鷹沢大町）

●将棋の部　有段A組／村上満久（大平中目）、有段B組／金子睦（蔵王町）、A級／佐久間昭夫（城南）、B級／小笠原琢磨（城南）

寒風の中をかるたが走る？

ジャンボかるた取り大会

白川小学校で１月31日、大きな絵札を背負って逃げ回る高学年の児童たちを、読み札に合わせて低学年の児童たちが追いかける「ジャンボかるた取り大会」が行われました。

今年のかるたのテーマは漫画などのキャラクター。児童たちは創意の時間に縦45㌢、横30㌢の画用紙に、人気キャラクターを鮮やかに描いた絵札を製作しました。校庭では寒風の中、父母などの盛んな声援を受けながら、目当ての絵札を追いかけ回していました。

鬼の目玉ぶっつぶせ

武家屋敷で「豆まき」

武家屋敷「旧小関家」で２月３日、数え42歳の厄年の男性が豆まきをして、今年一年の幸せと健康を祈りました。

親子連れなど約50名が見守る中、かみしも姿で豆をまいたのは「白石中学校第30回卒業生同窓会」の代表３名。「福は内、鬼は外、天打ち、地打ち、鬼の目玉ぶっつぶせ」と、白石に伝わる独特の掛け声を上げながら、威勢良く豆をまきました。

愛のかけはし、大切に

伯和会に福祉車両

チャリティー番組「24時間テレビ」の募金で購入された福祉車両の贈呈式が１月22日、仙台市の宮城テレビで行われました。

今回、県内で贈呈を受けたのは５つの社会福祉法人で、そのうち１台（スロープ付き軽自動車）が特別養護老人ホームえんじゅなどを運営する伯和会に贈呈。伯和会の相原秀施設長は「短期入所などの利用者搬送に使用したい。多くの方の善意を無駄にしないよう大切に使わせていただきます」と話していました。

多彩な表情勢ぞろい

こけし村「雛（ひな）の宴（うたげ）展」

かわいらしい姿が特徴の木地びなを集めた「第８回雛の宴展」が、弥治郎こけし村で２月２日から３月３日まで開かれています。

今年は弥治郎や遠刈田、鳴子などの工人が精魂込めて制作した「立ちびな」「座りびな」「こまびな」など合わせて約300点を展示、即売。多彩な表情と色彩が来場者を楽しませ、遠くから訪れた人たちも目を細めていました。

大回転に挑戦

分校スキー大会

福岡小学校の八宮、不忘、長峰分校と深谷小学校三住分校の児童が日ごろのスキー技術を競い合う、「南蔵王山ろく分校スキー大会」が２月７日、白石スキー場で開かれました。

出場した約50名の児童たちは、低・中・高学年に分かれて、それぞれ100・200・250㍍の大回転コースを２回ずつ滑走。ポールをはじきながら素早いターンを繰り返す児童たちに、父母たちから声援が送られました。

川井市長のせせらぎトーク

■人材育成■

二月号の『祖父の涙』にはいろんな反響があった。一番多かったのは小泉さんではないが「感動した」という反応、続いて「Ｏ氏とはあの有名だったＯさんのことですね。」とか「Ｏさんはよく知っていますよ。」といったものである。

三番目は「白石の経済人に、もっと気概を持てという意味があるのですか。」という問いかけだった。

二月六日、白石薬剤師会の会合があり、県薬剤師会の会長であり、白石出身でもある一條安彦さんとお会いした。

一條さんが「私が株式会社スズヒコをつくり、薬の卸しを始めた時、同業の会社は全国に二千百ほどありました。統合に統合を重ねて、今は百くらいでしょうか。恐らく数年後には五十以下になるでしょう。厳しい競争の時代がまだ続きます。」と言われたので、私は「結局会社と言わず、役所と言わず、すべて人ですね。」と答えた。

私としては一條さんの経営手腕を讃えたつもりだったが、彼はそうは受け取らなかった。

「おっしゃるとおりです。私はこの仕事を始めた時から、人材こそが会社を支えると思い、東北薬科大に重点を置いて、優秀な人たちを背伸びしながら雇用してきました。今の会社を支えているのは、その人たちなんです。」

その帰りに、タクシーの運転手さんから「『祖父の涙』を読みました。あれは人材育成の難しさを書いたのですか。」と尋ねられた。「えっ、そこまで読んでもらえたの。」と大感激だった。

有為の人材を生むためには、指導者はもちろん、その土地の気風、環境も大切である。

黒田四郎さんの『東北見聞録』という本の中に「こころがひとを生む―宮城県白石市」という項目があり、大約次のように記されている。

『白石から立派な人がたくさん出ているという。それは白石市には「こころ」があるからだということが分かった。

まず白石といわれるのは、神石として尊崇された白い石があるためと言われる。白石には祈りがあった。

伝統的特産品として「白石三白」がある。温麺、葛粉、そして和紙。一九九七年に亡くなられた遠藤忠雄さんは、平安時代の技術に追いつくため、ひたすら努力された。白石には、この道一筋の精進がある。

白石市延命寺境内には、安珍地蔵尊像がある。白石には、ひたすらな仏道修行と思いやりがあった。

甲冑堂と孝子堂もある。白石には親孝行もあった。

白石は碁の白石でもある。いつしか青森県黒石市との間に碁の交流試合が行われるようになり、白石、黒石双方で棋聖戦が行われた。白石には才覚もあった。

白石はこけし発祥の地でもある。また、強力な産業廃棄物最終処分場反対運動もあって自然を思いやる温かい心がある。

白石から立派な人がたくさん出ているのは、こうした「こころ」があるからではないだろうか。』

環境は整っている。素材もある。あとは指導者だけだろう。